

【本文・問題】龍谷古文:2022.1.31

## 【本文】

中将は、山におはし着きて、僧都もめづらしがりて、世の中の物語し給ふ。その夜は泊まりて、声尊き人々に経など読ませて、夜一夜遊び給ふ。禪師の君、細かなる物語などするついでに、「小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな。<sup>①</sup>(世を捨てたれど、なほさばかりの心ばせある人)は、難うこそ」などのたまふついでに、「風の吹き上げたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えづれ。あらはりとや思ひつらむ、立ちてあなたに入りつる後手、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあめれ。明け暮れ見るものは法師なり。おのづから目慣れて覚ゆらむ。<sup>②</sup>(不便なることなりかし)」とのたまふ。禪師の君、「この春、初瀬に詣でて、あやしくて見出でたる人となむ聞き侍りし」とて、見ぬことなれば細かには言はず。「あはれなりけることかな。いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞ、さる所には隠れぬけむかし。昔物語の心地もするかな」とのたまふ。

またの日帰り給ふにも、「過ぎ難くなむ」とておはしたり。さるべき心遣ひしたりければ、昔思ひ出でたる御まかなひの少将の尼なども、袖口さま異なれどもをかし。いとどいや目に、尼君はものし給ふ。物語のついでに、「忍びたるさまにものし給ふらむは、誰にか」と問ひ給ふ。<sup>③</sup>(わづらはしけれど)、ほのかにも見つけ給ひてけるを、隠し顔ならむもあやしとて、「忘れわび侍りて、いとど罪深うのみ覚え侍りつる慰めに、この月ごろ見給ふる人になむ。いかなるにか、いとも思ひしげきさまにて、世にありと人に知られむことを、苦しげに思ひてものせらるれば、かかる谷の底には誰かは尋ね聞こえむと思ひつつ侍るを、いかでかは開きあらはさせ給へらむ」と答ふ。「うちつけ心ありて参り来むにだに、<sup>④</sup>(山深き道のかごとは聞こえつべし)。まして思しよそふらむ方につけては、ことごとに隔て給ふまじきことにこそは。いかなる筋に世を恨み給ふ人にか。慰め聞こえばや」など、ゆかしげにのたまふ。

出で給ふとて、畳紙に、

A:

あだし野の風になびくな女郎花われしめ結はむ道遠くとも

と書きて、少将の尼して入れたり。尼君も見給ひて、「この御返り書かせ給へ。いと心憎き気つき給へる人なれば、うしろめたくもあらじ」とそそのかせば、「いとあやしき手をば、いかでか」とて、さらに聞き給は【X】ば、「はしたなきことなり」とて、尼君、「聞こえさせつるやうに、世づかず、人に似ぬ人にてなむ。

B:

うつし植ゑて思ひ乱れぬ女郎花うき世をそむく草の庵に」

とあり。こたみはさもありぬべしと思ひゆるして帰りぬ。

文などわざとやらむは、さすがにうひうひしう、ほのかに見しさまは忘れず、もの思ふらむ筋何事と知らねどあはれなれば、八月十余日のほどに、小鷹狩のついでにおはしたり。(中略)対面し給へるにも、「心苦しきさまにてものし給ふと聞き侍りし人の御上なむ、残りゆかしく侍る。何事も心にかなはぬ心地のみし侍れば、山住みもし侍らまほしき心ありながら、ゆるい給ふまじき人々に、思ひ障りてなむ過ぐし侍る。世に心地よげなる人の上は、<sup>⑤</sup>(かく屈したる人の心からにや)、ふさはしからずなむ。もの思ひ給ふらむ人に、思ふことを聞こえばや」など、いと心留めたるさまに語らひ給ふ。

(紫式部「源氏物語」による)

☆注釈

- 山 = ここでは、横川(比叡山の北側付近)を指す。
- 声尊き人々 = 声のすばらしい僧たち。
- 経など読ませて = 声明(しょうみよう)を歌わせて。
- 禪師の君 = 中将の弟。僧になっている。
- 小野 = 現在の京都市左京区の一部。一乗寺から八瀬(やせ)・大原付近を指す。
- 初瀬 = 長谷寺のこと。現在の奈良県桜井市初瀬にある真言宗豊山(ぶざん)派の総本山。
- またの日 = 翌日。
- 御まかなひ = 食事のお給仕。
- 少将の尼 = 尼僧に仕えている尼の名。
- 袖口さま異なれども = 袖口の色は異なっているが。尼僧になって法衣を着ていること。
- いや目に = 涙ぐんで。
- 忘れわび侍りて = 亡き娘のことが忘れられませんで。
- うちつけ心 = 浮気心。
- 思しよそふらむ方 = 亡き娘と同じように思っておられるという方。
- 畳紙 = 檀紙(だんし)、鳥の子紙など、上質な紙を折りたたんだもの。懐に入れておいて、鼻紙や歌を書きつける紙として用いた。
- 女郎花 = 秋の七草の一つ。夏から秋に小さな黄色の花をつける。しばしば女性にたとえられる。
- 心憎き気 = 思慮深い様子。
- 小鷹狩 = 小型の鷹を使って小鳥などを捕る鷹狩り。初秋に行う。

## 【問題】

問一 傍線部①「世を捨てたれど、なほさばかりの心ばせある人」の解釈

- ① 僧にはなったけれど、それでもあれほど趣味がよく、心配りのある男性
- ② 僧にはなったけれど、それでも美しい音楽にいくらかは関心がある男性
- ③ 尼僧にはなったけれど、それでもあれほど趣味がよく、心配りのある女性
- ④ 尼僧にはなったけれど、それでも美しい音楽にいくらかは関心がある女性

問二 傍線部②「不便なることなりかし」には、中将のどのような気持ちが含まれている？

- ① 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れていくのは、女にとって不都合なことだと思う気持ち。
- ② 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れようとする理由を、尼僧たちのために知りたく思う気持ち。
- ③ 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れていくよう、女の役に立ってやりたいと思う気持ち。
- ④ 女が尼僧ばかりの環境に少しずつ慣れていくと、尼僧たちが気の毒なのではないかと思う気持ち。

問三 傍線部③「わづらはしければ」とありますが、そのように感じている人は誰？

- ① 中将
- ② 浮舟
- ③ 尼君
- ④ 少将の尼

問四 傍線部④「山深き道のかごとは聞こえつべし」の解釈

- ① 「山深い道をたどってきて大変だった」と、少しは泣き言を申し上げようと思います。
- ② 「山深い道をたどってきたのに」と、やはり言い訳を申し上げる理由があるはずです。
- ③ 「山深い道をたどってきて大変だった」と、嘘のようですが申し上げてみたいのです。
- ④ 「山深い道をたどってきたのに」と、きっと恨み言を申し上げてよいのだと思います。

問五 AとBの和歌は、それぞれ誰のどのような気持ちを表している？

- ① Aの和歌は浮舟を手に入れたいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟がこの山荘に移ってからも思い悩んでいるから、そつとしておいてほしいという気持ちを示している。
- ② Aの和歌は浮舟に出家しないでほしいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟の出家したいという意志が固く、その熱意に尼僧の自分も応えたいという気持ちを示している。
- ③ Aの和歌は浮舟を手に入れたいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟の出家したいという意志が固く、その熱意に尼僧の自分も応えたいという気持ちを示している。
- ④ Aの和歌は浮舟に出家しないでほしいという中将の気持ちを示している。Bの和歌は尼が詠んだもので、浮舟がこの山荘に移ってからも思い悩んでいるから、そつとしておいてほしいという気持ちを示している。

問六 空欄 [ X ] を補うのに、最も適当なもの

- ① ら
- ② せ
- ③ れ
- ④ ね

問七 傍線部⑤「かく屈したる人の心からにや」の解釈

- ① 「自分の身が自分の思うようにならない」と浮舟がふさぎこんでいるからなのか
- ② 「浮舟が自分の思うようにならない」と中将がふさぎこんでいるからなのか
- ③ 「自分の身が自分の思うようにならない」と中将がふさぎこんでいるからなのか
- ④ 「自分が中将の思うようにふるまえない」と浮舟がふさぎこんでいるからなのか

問八 『源氏物語』の成立と同じ時期に活躍した人物

- ① 阿仏尼
- ② 和泉式部
- ③ 式子内親王
- ④ 持統天皇

## 【解説】

### 【解答一覧】

- 問一:③
- 問二:①
- 問三:③
- 問四:④
- 問五:①
- 問六:④
- 問七:③
- 問八:②

### 【解説】

問一:人物把握と語彙(正解 ③)

「心ばせ」という重要語を知っているかどうかの勝負

文脈: 禅師の君(男)が、小野に住むある人(尼君=女性)の住まいを見て感想を言っている。

心ばせ: 「気配り」「嗜み(たしなみ)」「情趣を解する心」。

判定: 「世を捨てて尼になったけれど、それでもあれほど風流な嗜みがある人(女性)は...」という意味になる。

①②は「僧」としている点で×。

④は「音楽」に限定している点で×。

問二: 心情把握(正解 ①)

「不便(ふびん)」の古語的意味を押さえる。

不便なり: 現代語の「不便だ」ではなく、「気の毒だ」「かわいそうだ」という意味がメイン(「不憫」に通じる)。

文脈: 中将(薰)は、若い美女(浮舟)が、むさ苦しい法師ばかりを見る生活に「目慣れて(慣れて)」しまうことを想像している。

判定: 「若い女性が、こんな年寄りばかりの環境に染まってしまうのは気の毒(かわいそう)なことだ」というニュアンス。

①が最も近い。「女にとって不都合(=よくない状態)」=「気の毒」。

### 問三：主語判定（正解③）

誰が「わづらはし（面倒だ、気が重い）」と思っているか。

直前：中将が「誰ですか？」と尋ねる。

直後：「……と答ふ（と答える）」。

判定：答えているのは、浮舟を隠している尼君だ。

尼君は、浮舟の素性（自殺未遂など）を説明するのが「面倒・複雑」だが、見られてしまった以上は誤魔化せない、と思っている。

### 問四 正解④

☆なぜ「恨み言」なのか

この文脈での「かごと（託言）」のニュアンスが勝負の分かれ目だ。

文脈：中将は、遠い険しい山道を越えてやってきた。しかし、尼君は「浮舟を会わせられない（隠し顔）」という態度をとっている。

中将の論理：「もし私が単なる浮気心（うつけ心）で来たとしても、『こんな山奥まで苦労して來たのに（会わせてくれないのでしょうか）』という不満・文句くらいは、言ってもいいはずだ」

☆選択肢の比較（なぜ①でなく④なのか）

①「泣き言」：弱音を吐くこと。「足が痛いよ～」「辛いよ～」というニュアンス。これでは、ただ中将が情けないだけになる。

④「恨み言」：相手の仕打ちに対する不満や恨み。「せっかく來たのに、その対応はひどいのではないか」という相手への抗議のニュアンスが含まれる。

古文の恋愛場面における「かごと」は、相手のつれない態度に対して、「こちらの苦労や思いをわかつてくれない」と訴える「恨み言（うらみごと）」として訳すのが定石！

中将の「威圧感はないが、理詰めで迫る」性格を考えても、弱音（泣き言）を吐くより、相手に道理を説いて迫る（恨み言）の選択肢④が適切！

## 問五：和歌の解釈（正解①）

【なぜ「出家しないで」ではなく「手に入れたい」なのか】

この問題のポイントは、和歌の「表面上の言葉」と、その奥にある「根本的な動機（気持ち）」のどちらを答えるかにある！

### 1. 中将の和歌（A）の分析

「あだし野の風になびくな女郎花 われしめ結はむ道遠くとも」

④の根拠（表面）：「風になびくな」＝「出家しないでくれ」これは直訳としては正解

①の根拠（本音）：「われしめ結はむ（私が独占しよう・自分のものにしよう）」という表現がある。

中将が「出家しないで」と言う理由は、単に尼になるのが惜しいからではない。「私があなたを自分の女として囲みたい（手に入れたい）」という強い独占欲があるからだ！

☆大学受験の「心情把握」では、

表面的な命令（～するな）よりも、その動機となる能動的な欲望（～したい）を選択させる場合、後者が正解になることが多い。

よって、「手に入れたい」とある ①or③が、心情説明として一段階深い。

### 2. 尼君の返歌（B）の分析

「うつし植ゑて思ひ乱れぬ女郎花 うき世をそむく草の庵に」

後半の選択肢（①か③か）

①「そっとしておいてほしい」：「思い乱れぬ（=ひどく思い悩んでいます）」と、浮舟の混乱状態を強調している。これは「今は混乱しているから、（無理に会おうとせず）そっとしておいてください」という「言い訳（拒絶）」のニュアンスになる。

③「熱意に応えたい」：これだと「浮舟は出家したがっているので、私はそれを応援します」という意味になる。しかし、直前の本文で尼君は「返事を書きなさい」と浮舟を説得（そそのかせば）している。尼君自身は二人の仲を取り持ちたいと思っているので、「出家を応援する」という選択肢は文脈と矛盾する。

### 【結論】

Aの「独占欲（手に入れたい）」

Bの「今は無理（そっとしておいて）」この2つが組み合わさっている①が、文脈上もっとも整合性が取れる！

問六：文法（正解④）

接続の問題

形：「聞き給は【X】ば」

意味：浮舟は手紙を書くのを嫌がって、中将の願いを「お聞きにならない」ので、尼君が代筆することになった。

文法：「聞き（連用形）+ 給は（ハ行四段・未然形）+ 【打消】+ ば（確定条件）」。

未然形に接続する打消の助動詞は「ず」。

「～ので（確定条件）」を作るには、「已然形+ば」の形にする必要がある。

「ず」の已然形は「ね」。

よって「聞き給はねば（お聞きにならないので）」となる。

問七：文脈把握（正解③）

誰が、なぜ「屈して（気が滅入って）」いるのか。

文脈：中将（薰）は、自分の人生を「何事も心にかなはぬ（思い通りにいかない）」と嘆いている、根っからのネガティブキャラだ。

解釈：「世の中の明るく楽しそうな人は、このようにふさぎ込んでいる（私のような）人の気質からして、似つかわしくないので」と言っている。

判定：「屈したる人」= 中将自身。理由は「自分の人生が思い通りにいかないから（注釈にある通り）」。よって③。

問八：文学史（正解②）

常識知識問題！

紫式部（源氏物語）：平安時代中期（一条天皇の中宮彰子に仕えた）。

選択肢：

- ①阿仏尼：鎌倉時代（『十六夜日記』）
- ②和泉式部：平安時代中期（紫式部と同僚のようなもの）
- ③式子内親王：新古今集の時代（平安末～鎌倉初）
- ④持統天皇：万葉集の時代（飛鳥・奈良）

# 【和訳】

### 【現代語訳】

中将(薰)は、山(比叡山の横川)に到着なさって、僧都も珍しく思つて、世間話などをなさる。その夜はそこに泊まって、声の尊い僧たちにお経(声明)などを読ませて、一晩中管弦の遊びをなさる。

(中将の弟である)禪師の君が、細かい話などをするついでに、「(帰りに)小野に立ち寄つて、なんとまあ、しみじみとした風情であったことよ。①世を捨てて尼になつたけれど、やはりあれほど氣配り(嗜み)のある人(=尼君)は、めつたにいない」などとおっしゃるついでに、「風が(御簾を)吹き上げた隙間から、髪がとても長く、美しい人が見えました。(御簾の中が)丸見えだと思ったのでしょうか、立つてあちらに入つていった後ろ姿は、並の人とは見えませんでした。あのような場所に、身分の高い女は置いておくべきではないようです。明け暮れ見るものは法師ばかり。(女性が)自然と(そんなむさ苦しい法師に)目が慣れてしまうでしょう。②(それは)気の毒なことですよ」とおっしゃる。

禪師の君は、「今年の春、初瀬(長谷寺)に参詣して、不思議な縁で見つけ出した人だと聞きました」と言って、(自分は詳しくは)見ていないことなので詳細は言わない。(中将は)「しみじみとすることだなあ。どのような人なのだろうか。世の中が辛いといって、そのような所(小野の山里)に隠れ住んでいるのだろうよ。昔物語のような気もするなあ」とおっしゃる。

翌日(中将が)お帰りになる時にも、「(小野を)素通りしがたくて」といつていらっしゃった。(中将が)しかるべき心遣い(贈り物など)をしたので、昔を思い出しているお給仕役の少将の尼なども、袖口の色こそ(尼姿で)異なっているが風情がある。ますます涙ぐんで、尼君はいらっしゃる。

話のついでに、「人目を忍んでいる様子でいらっしゃるのは、誰ですか」と(中将が)お尋ねになる。③(尼君は、事情を話すのは)面倒で気が重いけれど、ほんの少しでも(中将が)見つけなさつてしまつたのを、隠し立てするような顔をするのも不自然だと思って、「(亡くなつた娘の大君のことが)忘れかねまして、ますます罪深くばかり思われます慰めにと、ここ数ヶ月お世話している人でして。どのような事情か、とても悩みが多い様子で、生きていると人に知られることを、辛く思つていらっしゃるので、『このような谷の底(山奥)には誰が尋ねて申そうか(誰も来ないだろう)』と思っておりますのに、どうして見つけなさつてしまつたのでしょうか」と答える。

(中将は)「たとえ(私が)ふとした浮気心で参つたような場合でさえ、④『こんな山深い道を苦労して来たのに(会つてもくれないのか)』という恨み言(不満)は申し上げてもよいはずです。まして、(亡き人と)なぞらえていらっしゃるような方(=浮舟)については、いちいち隠し立てなさるべきではありませんよ。どのような事情で世を恨んでいらっしゃる人なのか。(私が)お慰めしたいものだ」などと、知りたそうにおっしゃる。

(中将が)退出なさるというので、畳紙(懐紙)に、A:あだし野(無常の野)の風になびくな(=尼になるな)女郎花よ。私が(お前を)独占して契りを結ぼう。道のりは遠くてもと書いて、少将の尼に託して(御簾の中に)入れた。

尼君も(その歌を)御覧になって、「このお返事をお書きなさい。(中将は)とても思慮深く気配りなさる方だから、不安なこともないでしょう」と(浮舟に)勧めるが、(浮舟は)「とても下手な筆跡を、どうして(お見せできましょか)」と言って、全くお聞き入れにならないので、「きまりが悪いことです」と言って、尼君が(代筆して)、「申し上げましたように、世間慣れしておらず、普通とは違っている(変わった)人でして。B:(都から)移し植えられて思い悩んでいる女郎花ですよ。(今は)憂き世を背く草の庵におりますので(そつとしておいてください)」とある。今回(の返事)はそうであっても仕方がないだろうと(中将は)許容して帰ってしまった。

手紙などをわざわざ送るのは、やはり気が引けて、しかしほのかに見た姿は忘れられず、思い悩んでいる事情が何事とは知らないが気にかかるので、八月十日過ぎの頃に、小鷹狩のついでにいらっしゃった。(中略)対面なさった時にも、「お辛い様子でいらっしゃると聞きました人の身の上が、心残りで知りたいのです。私自身、何事も思い通りにいかない気持ちばかりしておりますので、山住まいもしたいと思う心がありながら、許してくれそうもない人々(=母宮など)に、気兼ねして過ごしております。世間で気持ちよさそうに(楽しそうに)している人の身の上は、⑤このように気が滅入っている(私自身の)気質のせいでしょうか、不釣り合いなのです。もの思いをなさっているような人(=あなた)に、私の思うことを申し上げたいのです」などと、たいそう心を留めている様子で語らいなさる。

## 【練習問題】

## 【練習問題】

### 問一

傍線部①「心ばせ」の語義として、この文脈で最も適切なものはどれか。

- ・ア: 気配り・嗜み(たしなみ)
- ・イ: 意志の強さ
- ・ウ: 信仰心の深さ
- ・エ: 記憶力の良さ

### 問二

傍線部②「不便なる(ふびんなり)」の、古文における最も頻出の意味はどれか。

- ・ア: 気の毒だ・かわいそうだ
- ・イ: 便利ではない
- ・ウ: 貧乏である
- ・エ: 体調が悪い

### 問三

恋愛の場面における「かごと(託言)」の訳出として、必須の解釈はどれか。

- ・ア: 相手への恨み言
- ・イ: 弱音・泣き言
- ・ウ: 言い訳
- ・エ: 冗談・戯言

#### 問四

「聞き給はねば」の「ね」の文法的説明として正しいものはどれか。

- ・ア: 打消の助動詞「ず」の已然形
- ・イ: 打消の助動詞「ず」の連用形
- ・ウ: 完了の助動詞「ぬ」の已然形
- ・エ: 完了の助動詞「ぬ」の未然形

#### 問五

和歌の解釈において、「～な(禁止)」や「～し(願望)」などの表面的な表現の奥にある、詠み手の本音として最も重視すべき要素は何か。

- ・ア: 能動的な欲望(独占欲など)
- ・イ: 表面的な道徳観
- ・ウ: 情景描写の美しさ
- ・エ: 相手への単なる同情

#### 問六

『源氏物語』の作者、紫式部と同じ時代(平安中期)に活躍した人物を述べ。

- ・ア: 和泉式部
- ・イ: 阿仏尼
- ・ウ: 式子内親王
- ・エ: 持統天皇

#### 問七

会話文の主語判定において、最も確実な手がかりとなるのは何か。

- ・ア: 直後の「～と言ふ／答ふ」等の動作主
- ・イ: 直前の人物名
- ・ウ: 文中の形容詞の意味
- ・エ: 単なる勘

## 【解説】

### 問一 心ばせ

#### 【正解】ア(気配り・嗜み)

「心ばせ」を見たら、単なる「優しさ」だと思うことなかれ。そこには必ず「知性・教養・育ちの良さ」が含まれる。

ただ性格が良いだけでなく、「場をわきまえた振る舞いができる」「奥ゆかしさがある」のが「心ばせ」。

鉄則：選択肢に「気配り」だけ書いてあるものより、「気配り+教養(嗜み)」のニュアンスを含んでいるものを選ぶべき。

### 問二 不便なる

#### 【正解】ア(気の毒だ・かわいそうだ)

これは丸暗記ではなく、意味の派生(変化のルール)で理解しろ。そうすれば一生忘れない。

1. 不便(ふびん) = 都合が悪い(現代語と同じ)
2. 都合が悪い状態 = 世話をするのが大変だ
3. あいつは世話が焼けるなあ(大変な状態だなあ)
4. 見ていてつらい・かわいそうだ(=気の毒だ)

古文ではこの「4」の意味で出る。漢字で「不憫」と書くイメージを持とう。

### 問三 かごと

#### 【正解】ア(相手への恨み言)

「かごと(託言)」=「愚痴(ぐち)」だが、ただの弱音じゃない。

「私の気持ちも知らないで、あなたは冷たい」という、相手のせいにするニュアンスが必須だ。

・訳出のポイント：「言い訳」や「弱音」で逃げるな。「恨み言(うらみごと)」という強い言葉が入っている選択肢が正解になる確率が高い。

#### 問四 聞き給はねば

【正解】ア(打消の助動詞「ず」の已然形)

「ね」の識別に迷ったら、上を見るな、下を見ろ。これが時短テクニックだ。

- ・「ね」+「ば・ど・ども」

→ 下が接続助詞なら、この「ね」は已然形だ。

→ 已然形の「ね」を持つのは、打消「ず」しかない。

- ・(訳: ~ないので、~ないけれど)

- ・「ね」+「。(句点)／など」

→ 下で文が切れていれば、この「ね」は終止形だ。

→ 終止形の「ね」を持つのは、打消推量「じ」か、ナ変の活用語尾だ。(※完了「ぬ」の命令形の場合もあるが、文脈で分かる)

今回は「ね+ば(確定条件)」の形だから、秒で「打消の已然形」と判断しよう。

#### 問五 和歌の解釈

【正解】ア(能動的な欲望)

和歌において「な～そ(～しないでくれ)」という禁止表現や、強い反語が出てきたら、その裏にはドロドロとした独占欲があると思おうを

綺麗な言葉で飾っていても、本音は「誰にも渡したくない」「自分だけを見てほしい」というエゴ！

私大では、この「人間の生々しい本音」を見抜いているかどうかが問われる。表面的な「きれいごと」の選択肢に騙されないように！

#### 問六 文学史

【正解】ア(和泉式部)

関西圏の大学(特に関関同立)を受けるなら、「一条天皇の時代の才女たち(平安中期)」はセットで覚えよう。

- ・チーム平安中期: 紫式部、清少納言、和泉式部、赤染衛門

このメンツが並んでいたら「同時代」だ。阿仮尼はもっと後の鎌倉時代(『十六夜日記』)、式子内親王は新古今(平安末～鎌倉初)！

## 問七 主語判定

【正解】ア(直後の「～と言ふ／答ふ」等の動作主)

主語が分からなくなったら、会話文の最後のカギカッコ」を探そう！

その直後には必ず」と、～言ふ。のような形がある。

「誰が言ったか」の答えは、カギカッコの下に書いてある。

雰囲気や敬語だけで判断せず、まずはこの「形」を確認するのが、ミスをゼロにする鉄則！